中国新聞 2007/6/9(土)



早川・平寶などが家臣に与えなってしまう。しかし、合戦 なってしまう。しかし、 合戦は 九月は大の月で三十日まであ 来援し、翌二十九日、元就は上氏)の警団船二~三百艘が上氏)の警団船二~三百艘が上氏)の警団船二~三百艘が の来援は二十九日 (元就渡海 推測通りだとすると、来島衆 推測でとすると、来島衆 月晦日、来島衆来援は二十八し、元就渡海は合戦前日の九し、元就渡海は合戦前日の九い。おそらくは九月を小の月 の日付を間違えるとは思えな厳島神社の棚守房顕が合戦 た感状に明記されている。 **したと記している。この年の厳島に渡海して包ケ浦に上陸** ■来島村上が毛利方

包ケ浦から博奕尾越

多賀谷氏が大永七(一五二七) は博奕尾越作戦には前例があは、もちろん創作である。実

島熟知 房顕の献策か

来島・能島・因島村上氏の来援の有無については諸説がある。昨年刊行された「益田家文書之三」に収められた陶晴賢書状によって、防芸引分時賢書状によって、防芸引分時の上していたことが明らかとしていたことが明らかとしていた。ころであった。 は、もちろん創作である。実したとする軍記物の記述導したとする軍記物の記述博奕尾を越えて瞬の本陣を急襲した。シカが一匹現れて先襲した。シカが一匹現れて先 はない。結局、毛利方としてはない。結局、毛利方であったことは間 ことになる。 実なのは、来島村上氏という厳島合戦に参加したことが確 ■一瞬で勝敗決まる

陶本陣 厳島神社-厳島 博奕属 廿日市市 宮島町

第9部・再考 厳島合戦 ⑦

ひろしまへ

地理を熟知した房頭の献策によるものではないだろうか。 博奕尾の毛利軍は、関の声 をあげて坂を駆け下りた。これを合図として、海上に待機 していた来島衆や国衆たち も、一斉に上陸した。不意を 突かれた陶晴賢は、一矢も射 ることなく西山を目指して逃 走した。合戦の勝敗は、ほど である。

(秋山伸隆・県立広島大教授)